



「月も朧に白魚の、かがりもかすむ春の空…」と言えば、「稲瀬川庚申塚の場」でのお嬢吉三の名科白です。それにちなんで、今回のテーマは庚申塚を取り上げることにしましょう。実は、ここ練馬区は庚申塚が多く残っている地域としてとても有名です。例えば、光が丘から平和台へと続く田柄通りを進む途中にも、写真のような石造物が歩道に何気に立っていることに気づきます。ちょっと意識するとお分かりになりますが、それはもうあちこちに立っていて、都市化の波の中、よくぞ生き残ってくれたと褒めてあげたくもなります。

ところで、「腹の虫が治まらない」「腹の虫の居所が悪い」「虫の知らせで駆けつけると」等々使われる腹の虫とはどんな虫なのか、考えたことがありますか。



これが「三尸（さんし）」の虫です。生まれながらに人の腹中に棲んでいると言われる3匹の虫で、大きさはどれも約4cmで、結構大きいものです。棲む場所によって、頭部に住む上尸、腹部に住む中尸、下腹部に住む下尸に分かれ、姿は、上尸が青古（導師）、中尸は白姑（獣、狢犬のような形）、下尸は血尸（牛の頭が着いた足）をしています。

そして、何よりもこの虫は、普段から、身体の中で悪さをして病気の原因になったりしているのですが、それだけでなく、庚申の日の夜、寝ている間に宿主の身体を出て天に昇り、その悪い行いを天帝に告げ口しに行くのです。大きな罪は300日、小さな罪は3日寿命が縮むとされています。

ですから、人々は2ヶ月に1度回ってくる庚申（かのえさる）の夜、告げ口をされるのを恐れて寝ずの一夜を明かすこととなります。これを3年続けると満願になって、三尸を退治できると言われています。同時に、その記念に塔を建立するのが習わしで、それが庚申塚です。

一般的には、中央に青面金剛神立像があり、上部に清明を願う日月、下部には蓮華・天邪鬼・雌雄二鶏・三猿が刻まれています。しか



し、実際には千差万別の様式で、ウォッチングの対象として興味は尽きません。

庚申信仰については、かの柳田國男もさじを投げたと言われるほど不明のことばかりです。あまり深く考えずに、落語「宿屋の仇討（別名：庚申待）」でも聞きながら、笑い飛ばしておしまいとしましょう。